蔵守猫（くらもりねこ）の話②

作：富安陽子

　ユウ太の家の古い蔵には、蔵守猫が住んでいます。ユウ太の家だけではありません。古い蔵にはたいがい蔵守と呼ばれる番人が住んでいるのだそうです。番人の姿は普通、人の目には見えないらしいのですが、どういうわけかユウ太には蔵守猫の姿がはっきりと見えました。言葉だって交わしました。猫の話によれば、古い蔵の中にしまわれた捨てられない物にはどれも、忘れられない物語がくっついていて、蔵守はその物語を守っているのだそうです。

　ただし、蔵守猫はとっても気まぐれで、いつでも姿を現すわけではありません。ユウ太が蔵をのぞいて呼んでみても、気が向かなければ出てきません。かと思えば思いがけない時に蔵の中で鳴き声をたてて、ユウ太を呼んだりもします。

　その日ユウ太は、お母さんに頼まれて、蔵にしまってある扇風機を取りに行きました。そしたら、いたのです。蔵守猫が壁際の古いタンスの上に寝そべっていました。

「もうすぐ夏が来ますね」

　猫が大きな伸びをしながら言いました。

「ひとつ、何か物語でもお聞かせしましょうか？この蔵に眠っている物語達も、眠っているだけではつまらないと言っています。特に、夏が近づくこんな日には、誰かに物語を聞いてもらいたくて、皆うずうずしているのですよ」

　蔵守猫がそう言ったとたん、まるでその言葉に応えるように、タンスの横に積み上げられていたダンボール箱の一番上の箱が一つ、グラリとゆれたかと思うと、ガタンと音をたて、ユウ太の足元に落っこちてきました。

　びっくりして飛びすさるユウ太を見ると、まっ黒い蔵守猫は金と銀に光る双つの目を細め「うふふふ」と笑いました。

「ほらね。箱の中の誰かさんが物語を聞いてくれと騒いでいますよ」

「何が入ってるの？」とユウ太がたずねると、猫はすまして前脚で顔を洗いながら「開けてごらんなさい」と言いました。

　猫に見つめられ、仕方なくユウ太は落ちてきた箱に手を伸ばしました。埃をかぶった箱の蓋を開けてみると…。

「これ、鞄？」

　箱の中に入っていたのは、ぺちゃんこにひしゃげてボロボロになった大きなワニ革の旅行鞄でした。と、言っても、もう鞄とは呼べないぐらいオンボロなんですが…。

「そう、ワニの革で作った鞄です。一頭のワニから作られているんですよ。その鞄は、いろいろな持ち主の間を渡り歩き、最後にあなたのおばあさんの物になりました。おばあさんは若い頃、パリの蚤の市でこの鞄を買ったんです」

「おばあちゃんてパリに行ったことがあったの？」と驚くユウ太に、

「行きましたとも」と猫は答えました。

「あなたのおばあさんは若い頃、世界中を旅して回っていましたからね。そして偶然パリの市場の店先でこの鞄を見つけ、一目で気に入ってしまったんです。今でこそボロボロですが、この鞄も昔

は、大きくて、つややかで、海の色に染めたワニの革でできた、それは立派で美しい鞄だったんです。しかも、びっくりする程安い値段がつけられていました。“どうしてこんなステキな鞄が、こんなに安いの？”とおばあさんは店の主にたずねました。するとね、主が言ったのです。“この鞄はおやめなさい。実はこの鞄にはワニの幽霊がくっついているんですよ”ってね」
「おばあちゃんはなんて言ったの？」と、ユウ太がたずねると、蔵守猫は金と銀の目を細めてニヤリと笑いました。
「“それなら、ぜひ買わなくちゃ”……。そう言って、おばあさんはこの鞄を買ったんです」
「ワニの幽霊は出てきた？この鞄には本当に幽霊がくっついていたの？」
　たずねながらユウ太は、目の前にある鞄を見つめ、ふるりと身震いをします。猫は平気な顔をして、また話し出しました。
「くっついていましたとも。その夜、おばあさんが泊っていたホテルの部屋にさっそく出てきましたよ。おばあさんが夜中に目を覚ますと、頭のてっぺんからしっぽの先まで２メートルはあろうかというワニがベッドの横のソファの上に寝そべっていたんです。そこでおばあさんはベッドから出ると、テーブルを挟んだ向いの席に腰を下ろして、ワニに話しかけました。“さあ、話してちょうだい。あなたはどうして幽霊なんかになって、いつまでもこの鞄にくっついてるの？何か言いたいことがあるなら言ってごらんなさい。相談にのってあげるから”と―」
　蔵守猫は、おばあさんがその夜聞いたというワニの身の上話をユウ太に語ってくれました。それによると―。
　生きていた頃、ワニはナイル川に住んでいました。でもワニはワニの暮らしにうんざりしていたのだそうです。濁った川の中に潜んでいて、水辺に近づく動物を狙ってガブリと噛みつきお腹を満たすだけの生活にうんざりしたワニは、別の生き物に生まれ変われますようにと、ナイル川の神、セベクに祈りました。毎日毎日熱心に祈っていると、遂に祈りが通じたのかある日夢の中にセベクが現われ、ワニに言ったのです。
「百日の間、一ぴきの動物の命も奪わずにいるか、あるいは、動物一ぴきの命とおまえの命を引き替えにするか、そのどちらかをやりとげられれば、おまえをワニではない生き物に生まれ変わらせてやろう」―と。
　蔵守猫がひと息ついて前脚をペロペロなめ始めたのでユウ太はやきもきして言いました。「ねえ、それからどうなったの？」
　猫が物語を続けます。
「ワニは動物の命を奪うのをやめました。どんなに腹ぺこのフラフラになっても、セベクとの約束を守り通しました。そして、もうあと一日で百日になろうというその日、ハンターに捕まって鞄にされてしまったんですよ。それが悔しくて心残りで、幽霊になって鞄にくっついていたわけなんです。“まあ！殺されて鞄にされちゃうなんて、可愛そうに！”……。おばあさんは自分がその鞄を買ったことも忘れて思わず叫びました。そしてその時、この気の毒なワニの幽霊を慰めるために、鞄と一緒に世界中を旅して回ろうと心に決めたのです。その日からおばあさんは、ワニの鞄を連れて世界を旅して回りました。インドや中国や南極にまでね……」
　蔵守猫は話し疲れたのか大あくびを一つ。それからまた話の先を続けます。
「ある時、おばあさんがワニの鞄を持って懐かしいパリの町を訪れた時のことです。シャンゼリゼ通りの大きな交差点にさしかかろうとした時、一ぴきの白い猫が通りを横切って、こっちにやって

来るのが見えました。そこに、まっ赤なスポーツカーがものすごいスピードで走ってきたのです。“あっ！猫が轢かれちゃう！”と、おばあさんが叫んだその時です。おばあさんの持っていたワニの鞄がひとりでに交差点のまん中に向かって飛んでいったのです。飛んでいった時、それは確かに鞄でした。でも道の上に落っこちた時、おばあさんにはそれがワニに姿を変えたように見えました。ワニは、迫り来るスポーツカーの前で立ちすくむ白猫を、しっぽのひと振りで跳ね飛ばしました。白猫はポーンと飛ばされて、おばあさんのすぐ側の歩道の上にヒラリと下り立ちます。そのとたん辺りに激しいブレーキの音が響きわたりました。見れば、急ブレーキをかけた赤いスポーツカーが交差点のまん中で停まっていました。ワニの鞄はその車に轢かれ、ぺっちゃんこのボロボロになっていたそうです。おわかりでしょう？」

　猫は金と銀の眼を光らせてユウ太をじっと見つめました。

「それが、この鞄です。だから、こんなにぺちゃんこのボロボロなんですよ」

「ワニの幽霊はどうなったの？」

　ユウ太がたずねました。

「それっきり二度と、ワニの幽霊が現われることはありませんでした。でも……」と、猫は言葉を続けます。

「それから何年か後、おばあさんはまたパリを訪ねたんですよ。郊外の小さな町の通りを歩いていると、町角のパン屋さんから男の子がひとり、おばあさんの所へ走ってきました。“ぼくのこと、覚えてますか？”とその子はたずねました。おばあさんは、びっくりして、その子の顔をまじまじと見つめました。見覚えのない男の子です。“あなたはだぁれ？”と、おばあさんがたずねると、その子はニコニコして言いました。“ぼくは昔あなたの鞄でした。もっと昔はね、ナイル川のワニでした。今は人間の子に生まれ変わったんだよ”……そう言うとその子は、焼きたてのバケットを一本、おばあさんに手わたすと、店の中へ走ってもどっていったということです」

「じゃあ、鞄の命と引き替えに白猫の命を助けたから、ワニは人間の子に生まれ変わったっていうこと？」

　目を丸くするユウ太に蔵守猫は首をかしげてみせました。

「さあ？どうでしょう。私は物語の番をしているだけですのでね。それ以上のことはわかりませんよ」

　その時、お母さんの声がしました。

「ユウ太！扇風機はみつかったの？」

　ほんの一瞬戸口の方に向けた目を戻してみると、もう蔵守猫の姿は消えていました。

　ユウ太はため息を一つ。古いワニ革の鞄の入ったダンボール箱に蓋をして、元の場所に戻すと、扇風機を探し始めました。